

J. Agric. Sci., Tokyo Univ. Agric., 53 (2), 120–129 (2008)
東京農大農学集報, 53 (2), 120–129 (2008)

E.M. フォースター：『インドへの道』

—融合の模索—

寺 本 明 子*

(平成 20 年 2 月 28 日受付/平成 20 年 4 月 25 日受理)

要約：E.M. フォースター (E.M. FORSTER 1879–1970) の代表作『インドへの道』(*A Passage to India*, 1924) は、彼が若い頃のインド滞在経験を踏まえて書かれた作品である。それはインドの自然環境 (気候や風土)、20 世紀初頭のインド駐在英国人の生活実態、更に、彼が不思議な魅惑を覚えたヒンズー教の思想を背景に、「東洋人と西洋人の共存は可能であるのか」という深刻な課題に約 10 年の歳月を費やして取り組み完成したものである。

作品は 3 部構成で、それぞれのタイトルが 'Mosque' 'Caves' 'Temple' である。弁証法の手法によって、まず、西洋人から見たインドの混沌とした姿—「定立」(thesis) を示し、そこに西洋的論理や秩序—「反定立」(antithesis) を持ち込み、両者が激しく衝突する様を提示する。そして、総ては長年にわたって培われたインドの叡智 (神秘的なヒンズー教の思想) によって統合される—「総合」(synthesis)。言い換えれば、ヒンズー教の教義が東洋的要素と西洋的要素の両者を包み込む。

ところが、フォースターは、総てを包み込むヒンズーの教えを観念的に理解できても、現実的には受け入れ難く、深い虚無感に陥ってしまう。それ故、作品の最後のところでプロットの乱れが見られ、具体的な人間関係の打開や、明るい展望が示されていない。そしてこれ以降、小説が書けなくなった。この様に、作品は究極的に虚無感をはらんではいないが、それにも関わらず、実際のところ、それが為に、東洋人も西洋人も人間として相互に理解し、共存に努めなくてはならないとする彼のヒューマンイズムが姿を見せて作品が終わると言える。

この論文では、インドの混沌を「時間」「空間」「音」から分析し、西洋的論理との衝突を経て、東洋と西洋の融合がなされる過程を、「水」「空」「風」というシンボルを中心に読み解く。

キーワード：インドの非合理性 (カオス：混沌)、イギリスの合理性 (ロゴス：論理)、ヒンズー教の教義 (ミトス：包括性)、思想の弁証法的統合、虚無感

I. 初 め に

E.M. フォースター (E.M. FORSTER 1879–1970) は、自分の生涯で影響を受けた国をイギリスとイタリアとインドであると述べているが、『インドへの道』(*A Passage to India*, 1924) は、この作品を手がける前の彼の 2 度のインド滞在が執筆の動機となっている。最初の滞在は、ケンブリッジで指導を受けた特別研究員 (フェロー) に同行したものである。オクスフォード大学への進学準備の為にラテン語の個人教授をしたことがきっかけで、27 歳の時に親しくなったイスラム教徒のインド人貴族、S.R. マスード (S.R. MASOOD) や、大学卒業後インドに渡った友人を訪ねるのが目的であった。2 度目のインド旅行ではマスードの案内で、バラバー洞窟 (Barabar Caves) を訪ねている。この洞窟が、『インドへの道』で大きな役割を果たすマラバー洞窟のモデルとなる。これら 2 度にわたるインド滞在によってフォースターは、インド駐在英国人の生活実態やインドの

自然環境に接し、物質的にも精神的にも多くの刺激を得た。更にまた、不可知論的なヒンズー教にも触れて不思議な魅力を感じた。

フォースターの作品は、再読する度に新しい感動を引き起こす。それは、象徴性が強く、登場人物像が複雑で、更に、彼自身がはっきりと結論を下さないところに由来するのも知れない。『インドへの道』も、冒頭から様々な対立があり、複雑な人間関係を示している。統治者のイギリス人と被統治者のインド人、その中のイスラム教徒とヒンズー教徒、それぞれの階級に属する人達などが複雑に絡み合う。事実、インド程、対立による分裂や抗争の絶えない所は無いであろう。しかし、そのように混沌とした人的情勢総てを、気候や風土も含むインドの自然環境そのものが、静かに包み込んでいる。このようなインドの「混在」、**「増埒」**、**「混沌」**が、この作品全体に浸透している。しかし、作者は、「あるがままのインドの姿」をルポルタージュ風に、ただ客観的に描写しているのではない。一見するとイ

* 東京農業大学応用生物科学部教養分野

インド人と在印英国人の対立描写が色濃く映るが、一步進んで、そのような状況における両者の融合の可能性の探求—「インド人がイギリス人と友達になることは可能だろうか」—がこの作品の大きなテーマとなる。それは、あくまでも人間としてあるべき姿を探るものであり、‘my main purpose was not political, was not even sociological’¹⁾と彼自身述べている。具体的に言えば、人間同士の理解を実現する鍵は‘human nature’にあり、‘political institutions’には無い²⁾ということである。フォースターが批評家として絶大な信頼を寄せたピーター・バラ (Peter BURRA) は、このインド全体を取り込んでの融合の模索、人々はどうしたら理解し合い、共存し得るかという作者の深刻な課題について、‘...the author’s interest is in the clash of human beings, the struggle which any one individual must endure if he is to achieve intimacy with any one other. The fundamental personal difference is again deliberately heightened by an external circumstance—the difference of race.’³⁾と述べている。作品では、この大きな問題の解決を、イスラム系インド人の医師アジズ (Aziz) とリベラリストの在印英国人で、官立大学の学長を務めるフィールディング (Fielding) の交流を通して模索している。

「混沌」(muddle) について、イギリスから息子を訪ねて来てインド人達に大きな影響を与えることになるムア夫人 (Mrs. Moore) は ‘I like mysteries but I rather dislike muddles.’ と言うが、フィールディングは ‘A mystery is a muddle. ... A mystery is only a high-sounding term for a muddle.’ (p. 62) と言う。彼等にとっての「混沌」は、西洋人の論理では理解できない、受け入れ難い、目を背けたくなるインドの有り様を指す。そして彼等は、インドでは総てが混在し、混乱を引き起こしており、その状況は信じ難い程不安定であると考え。反対に、インド人達はそんな「混沌」を総て受け入れて共存しているばかりでなく、その「混沌」が内包するエネルギーは力強い生命力を内に潜めており、人と人との理解を可能にし、結び付きの絆をより強固にする手助けとなるのではないかと見る。そこで私としては、『インドへの道』に提示されたインドの「混沌」を検証することから、この作品の考察を始めたいと考える。

II. 時間の混沌

インドは、本来ゆっくりと時間が流れ、200年前と100年前と50年前とほとんど同じ姿であるとされる。この小説の中では、現在、過去、未来の時間の感覚の飛躍は、インドの詩の世界が過去を現在に運んで同化する様子によって描かれている。登場人物達が最初に現れる第2章に早くもこの「時間」の混沌に関する記述がある。アジズが古い詩人の詩を朗読する場面である。

They [Aziz’s friends] listened delighted, for they took the public view of poetry, not the private which obtains in England. ... India—a hundred Indias—whispered outside beneath the indifferent

moon, but for the time India seemed one and their own, and they regained their departed greatness by hearing its departure lamented, they felt young again because reminded that youth must fly. (p. 10)

インド人達は、古い歴史上の出来事も現在の心情に容易に結び付けることができる。それは、アジズがフィールディングの家に招かれた時に、18世紀に建てられた立派な部屋で自分が昔の裁判官になった様に夢想する場面にも見られる。彼は、貧しい者や困った者に次々とお金を施す姿を、まるで現実の様に熱意を込めて語る。過去と現在の区別が曖昧になるのは彼の特徴で、バブール皇帝、アラムギル、ムガル王朝、アクバル皇帝などの話が次々と彼の口から湧いて出て来る。

彼の時間の概念が最も自然に飛躍するのは、亡くなった妻に思いが至る時である。彼は、初めは愛情も感じずに、どちらかと言えば不満を感じながら彼女と結婚したのであるが、その聡明さ、情の厚さ、忠実さなどを知るうちに彼女を愛し始めた。しかし彼女は2人目の子供を生む時に命を落とし、アジズが、「彼女の代わりになる人は、もう現れない」と知った時に、彼女の存在は永遠に彼の心に住むことになった。

For an instant he recalled his wife, and, as happens when a memory is intense, the past became the future, and he saw her with him in a quiet Hindu jungle Native State, far away from foreigners. (p. 266)

このような時間概念を越えた彷徨は、この作品のクライマックスとも言えるアデラ・クエステッド (Adela Quested) の裁判シーンにも現れる。彼女はムア夫人と共に、彼女の息子ロニー・ヒースロップ (Ronny Heaslop) との結婚を考えてインドに来たのだが、「本当のインドを見たい」という探究心の固まりでもあった。しかし彼女は、アジズが計画した日帰りの旅で行ったマラバー洞窟 (正確には、無数に集まる洞窟の中の一つであるカワ・ドル (Kawa Dol)) の中でアジズに襲われたと思って錯乱状態になり、裁判を起こすことになる。しかし、「誰に襲われたのか」或いは「そもそも襲われなかったのか」—総てが不明で、耳を離れない不可解で神秘的なこだまと、感情の混乱の中で、彼女は、当初はアジズを犯人だと主張したのだが、結局、法廷で自分の証言を翻し、裁判を取り下げる。その経緯を彼女がたどってみると、ロニーとの婚約について、当日思い煩っていたことを思い出し、あたかも洞窟に自分が今存在しているかの様に当時の情景や事情が甦って来る。

She didn’t think what had happened, or even remember in the ordinary way of memory, but she returned to the Marabar Hills, and spoke from them across a sort of darkness to Mr McBryde. The fatal day recurred, in every detail, but now she was of it and not of it at the same time, and this double relation gave it indescribable splendour. ... As she spoke, she created the Kawa Dol, saw the

niches up the curve of the stone, and felt the heat strike her face. (pp. 216-7)

ここで注目したいのは、西洋的論理で縋てを解決しようとしていた彼女が、裁判の最中に過去の世界に精神を移動させ、その日の景色がまざまざと目に浮かんだだけでなく、自分がどの時空に存在しているのかが曖昧になったということである。そうした中で事件の真実が述べられることになる—「私、間違いをしていたようです。アジズ先生は、私の後から洞窟に入ったのではありませんでした。」これこそが、インドの持つエネルギーによって導き出された解決である様に思われる。フォースターは確かに「混沌」の中に存在する神秘の力をここで肯定しているように思われる。

III. 空間の混沌

無秩序や混沌を引き起こすのは、「時間」だけではない。インドでは物の位置やその見え方の認識が不確かであり、それがもてて人間の判断力が揺さぶられ、鈍くなる様子が提示されているのも、この作品の特徴である。まず、アデラが在印英国人の為の娯楽クラブからマラバー洞窟を眺めている場面では、その存在感とそれが醸し出す不気味さが示される。

...the distant Marabar Hills, which had crept near, as was their custom at sunset; if the sunset had lasted long enough, they would have reached the town.... (p. 39)

洞窟がこちらに迫って来るという感覚は、この後、彼女が見たがっていたインドとの出会いがある（と同時に、それは彼女にインドへの恐怖を植え付ける）ことを示している。この洞窟については、'As it [the train] left the Marabars, their nasty little cosmos disappeared, and gave place to the Marabars seen from a distance, finite and rather romantic.' (p. 151) と書かれ、遠くから見ると美しく、近付けば破壊的であるという描写もあるが、見る時刻や距離感によってそのイメージが全く違うということがわかる。フィールディングは事件の日の夕方、クラブのベランダから、洞窟が膨れ上がって空全体に広がるのを見たが、この洞窟がもたらす不安感は、見る人の心をそのまま映し出しているだろう。

この洞窟は、その位置や見え方の印象だけでなく、形状もつかみどころが無い。第1章でなされる洞窟の描写 'Except for the Marabar Caves—and they are twenty miles off—the city of Chandrapore presents nothing extraordinary.' (p. 2) が、洞窟の異常さを二重否定の表現で強調する。チャンドラポアの町の南の方に、「一群のこぶしと指が大地から突き出て」いるのがこの洞窟である。「手」の形をしているということは、「パンの物語」("The Story of a Panic") で牧神パンが少年を狂わせる舞台となる山が、掌を上にした、何本も指のある手の様だという描写に通じるものがある。マラバー洞窟は、同じ形をした無数の洞窟から成り、人工の通路を通って行ける様になっているが、神々の出現以来、開かれたことの無い、入り口の

無い部屋が4百、4千、或いは百万もあると言われている。人がこの洞窟に行って帰って来ても、面白かったのか、つまらなかったのかの判断もできない。'He finds it difficult to discuss the caves, or to keep them apart in his mind, for the pattern never varies, and no carving, not even a bees' nest or a bat, distinguishes one from another.' (p. 117) という状態である。洞窟に近付くにつれ、物体の存在も危うくなり、「精神的沈黙」が人々を襲い、道の脇にある塚山は何であるかもわからず、蛇だと思ったものは、単なる椰子の切り株であったりする。この洞窟は、地球が太陽から生まれたということを示す名残が外形にある一方で、巡礼や聖者も避けて通る異常な場所である。この混沌とした場所で、不可解で神秘的な事件が起こり、アジズが罪に問われ、結局無実が認められることになる。

更に、「空間」の混沌は、その空間の捉え方によって見え方の違いを生む作用がある。問題は、例えば、第1章に書かれた、インド人の住む地区の見え方である。そこは、「町はみすばらしく、寺院は目を引かない。立派な邸宅はいくつか存在するが、それも庭園の奥深くに隠れているか、或いは、招かれた客以外はとて足踏み入れる気にならない不潔な路地の陰に引っ込んでいる。…木材さえも泥でできているかの様で、住民達も動く泥の様だ。目に入るものは総て価値が低く、単調である」と描写される。他方、イギリス人居留地は「何の感情も呼び起こさない。心を魅了することも無いが、かと言って不快な気分にはさせるとい訳でもない。町は合理的に設計され…醜悪なところは少しも無く、景色だけは美しい。」まるで逆の世界である。それらはそのまま住む人間にも当てはまる。インド人社会は、宗教やカーストの対立という波乱を含み、イギリス人に抑えつけられながらも、したたかに生きている。それはインドの生命力そのものである。それとは対照的に、イギリス人社会は、表向きは整然としているが、自分達と異質なものの、例えば本国から来たばかりのアデラには、同国人とは言え、警戒の目を光らせる。ここで「混沌」と関連して興味を引くのは、インド人の住む場所が、高台のイギリス人居留地から見ると大変美しく見え、醜いものの数々が菩提樹の茂みに完全に隠れているということである。従って、「高貴な川に洗われる美しい庭園の町」を期待してインド人社会に近付いて行くと、幻滅を味わうことになる。総ては見方によって変わる、何一つ安定しているものはないのだというフォースターのメッセージがここに感じられる。

そして、所詮、人が住む場所など、こうもりやねずみ、小鳥や昆虫にとっては、「永遠の密林から自然と生まれ出したもの」であり、それらの生き物が家の内も外も関係なく巣を作ってしまうという。「生き物の大多数にとって、自らを人間と呼んでいる少数派が、何を欲し、何を決定しようとはほとんど重要ではない。…物言わぬ生きもの世界はすぐ間近にあって、人間が疲れるやいなや支配権を取り戻そうとする。」その様子は、'Not only are human affairs seen in the perspective of the whole animal world, but all of life is seen as an almost imperceptible instant in the vast and timeless story or inanimate nature.'⁴⁾ と、空間

だけでなく時間的にも卑小な人間像を提示する。インド人には当然である現象に西洋人が遭遇すると、時間的にも空間的にも「混沌」と映るのは、西洋的受容感覚（論理）の混乱に由来するからに違いない。

IV. 西洋的論理

イギリスは支配者として、西洋人の思考回路を用いて、混沌としたインドを治めようとする。その最前線の職務に励んでいるのが、パブリック・スクール出身の階級意識を持ったイギリス人の典型であるロニーに他ならない。母親に彼が自分の治安判事としての仕事について語る場面がある。

Every day he worked hard in the court trying to decide which of two untrue accounts was the less untrue, trying to dispense justice fearlessly, to protect the weak against the less weak, the incoherent against the plausible, surrounded by lies and flattery. (p. 44)

彼はインド人に親切にしようなどとは思わない。治安を維持するのが彼の務めであり、イギリス人がインドにいることの意味を知らしめる為にも、毎日毎日勝訴と敗訴の線引きをしながら判断を下すのだった。また、彼を訪ねて来たアデラは、西洋的な知的好奇心の塊であり、‘She goes on and on as if she’s at a lecture—trying ever so hard to understand India and life, and occasionally taking a note.’ (p. 110) といった調子である。彼女は知的であるだけでなく、分別があり、感じやすい性質でもあるが、生来の誠実さと育ちの良さを示す端正さも備えた若い女性である。アデラのインドへの対応は、知的で論理的な理性に基づくものであり、高度に複雑な問題をはらむインドは彼女の理解を超越しているが、イギリス人の高慢で横柄な態度は彼女にも理解できる問題で、我慢がならない。このことがロニーとの婚約解消につながる。彼女はインドでのイギリス人を理解できても、インドの心には理解が及ばなかった。

西洋の論理を重んじるのはこの2人だけでなく、フィールディングもそうである。洞窟事件の後、誰が犯人なのか、なぜ裁判でアデラが真実に目覚めて訴えを取り下げたのかを論理的に解明しようとし、彼女と話し合う。もともと「チャンドラポアには不向きな信条」との作者の但し書き付きで、人間理解の為には「善意プラス教養と知性の助けを借りる」のが一番良いと考えている彼であるが、原因究明もすべて論理無くしては前に進めない。しかし、その2人が様々な可能性について筋道立てて話し合う姿は、小人同士が握手している譬えの通り、非常に狭い限界の中でのことなのである。

こうした西洋の論理は、視覚的には形式美の形をとる。アデラもフィールディングもイギリスに帰国する際に通ったエジプトやイタリアの形式美に感動する。あらゆる物が「見当違いの場所に」あるインドと違って、地中海の調和の中では自然や建造物が「あるべき場所に」存在するのだ。「インドの人にはこの形式美の喜びは理解できないだろう」

とフィールディングは考えつつ、心の平安を実感して祖国に向かう。

また、西洋的論理の限界を喜劇的に表わしているのは、イギリス人宣教師2人の会話である。神の愛はどこまで行きわたるか話し合い、黒人と白人は平等に扱われるとした後で、それでは、猿はどうか、ジャッカルは、蜂は、オレンジは、泥は、バクテリアは、などと考えていく。すると段々2人の意見が分かれて来て、訳がわからなくなり、実際は人間の中にも教会の集会に来て欲しくない人がいることに思いが至り、この分類は結局無駄になるというエピソードが、そのことを示唆している。

V. 「音」による東洋的混沌と西洋的論理との衝突

音は元来、人の感情に訴えるもので、聞き手によって、快くも、不快にも、捕らえどころのないものとも受け取れる。従って、マラバー洞窟のこだま (echo) は、西洋人の受け取り方とインド人のそれとは、当然、異なってくる。

マラバー洞窟の部屋はどれもこだまを持っているが、それは他の洞窟のものとは違い、聞こえた音を繰り返すという性質のものではない。どんな音でも ‘boum’, ‘bou-oum’, ‘ou-boum’ という様な意味不明の音に変えてしまうのだ。何人かの人が洞窟内で一度に声を出すと、反響が反響を呼び、洞窟内は無数のヘビが身をくねらせた様になる。つまり、このこだまは「人間の言語による指示性を拒むもの」⁵⁾である。洞窟について人の言葉で説明することは不可能であり、平原や鳥達が「異常だ」と言うばかりである。ヒンズー教の高僧ゴドボレ教授 (Professor Godobole) は何かを隠している様な風情で、洞窟についての説明には口をつぐむ。こだまの音を表わすスプリングさえも「人間のアルファベットで表わそうとすれば」という但し書き付きで、人智を超える部分を持つものであるとわかる。洞窟内では、希望も礼儀正しさも、鼻をかむ音も、ブーツのキューキュー鳴る音も、総て同じ響きとなる。それは単に音の問題だけでなく、ムア夫人が、聖書の言葉も「バウム」という響きに変わってしまうと考えたように、西洋人の思考回路そのものを混乱させる力である。

このこだまは、最初ムア夫人の耳から精神に作用し、次にアデラに乗り移る。アジズや他の召使達、後から来たフィールディングは、洞窟に入ってもこだまに悩まされたりしなかった。その理由は何か。石和田は、「マラバー洞窟は実際には侵入者の内面を映し出しているのに過ぎない。…ムア夫人とアデラは、マラバー洞窟でインドの混沌に出会い、自らの心の中の混沌を直視したのである」⁶⁾とし、その内容はインドで出会った恐怖やロニーとアデラの結婚についての不安であると分析しているが、実際の問題はもっと大きいと思われる。つまり、このこだまに襲われた2人の女性には「精神的危機」という共通点があるのだ。ムア夫人は、インドに来てからは神の名を頻繁に口にしなければならず、しかも、それに関わらず、何か空しさを感じていた。アデラは、洞窟に入る直前にロニーとの愛に疑問を感じながらも、今破談にすると周りに迷惑がかかるとい

う理由で自分を無理に結婚生活に押し込もうとしていた。ムア夫人は‘a crisis of faith’を、アデラは‘a crisis of conduct’を経験していたのである。それに比べて、アジズもフィールディングも、内容こそ違いますが、自分の価値観や洞察力を持ち、それに従って生きている。その為、こだまの影響を受けなかったのだ⁷⁾。こうした意味では、作者フォスターが当初フィールディングに与えていた、こだまに恐れを感じる役柄がムア夫人へと移行したことは、‘less rationalistic and more mystical’なムア夫人と‘more analytical’なフィールディングの人物像を描く作品の構成上、適切だったと言える⁸⁾。

最初の洞窟にアジズ、アデラ、大勢の召使達と入った時に息詰まるような圧迫を感じ、聴覚を揺さぶるこだまの恐怖を経験したムア夫人は、「次の洞窟には自分には行かないし、もし行くなら少人数で行った方がよい」と勤める。そこで、アジズとアデラとガイドの3人で次の洞窟に行き、謎に包まれた事件が発生することになる。洞窟でアデラは視覚を阻まれる。彼女が洞窟の中を一人で進むと、闇に閉ざされて何も見えなくなり、誰ともわからぬ犯人に襲われて、恐怖の中で戦うことになる。彼女の武器は、ロニーから借りた双眼鏡（視覚を象徴するもの）だった。それまで洞窟の中でアデラの視覚を刺激していたのは、壁に映るマッチの炎であった。決して一つになることができない「空気を呼吸している炎」と「石を呼吸している炎」が、彼女の不安と恐怖の伏線であろう。本来、炎を生み出す「火」は、ヘラクレイトスによると、「万物の根源」であるが、ここでは彼女に判断の感覚を狂わせ、判断力を麻痺させ、錯乱状態の中で幻聴、幻覚、妄想を引き起こさせることになる。

アジズを加害者だと訴えるアデラは、彼の有罪を主張すると耳鳴り（こだま）が強くなる。フィールディングは、事件について彼が持つ手掛かりから、アジズは無罪で、ガイドが犯人に違いないと判断する。そして彼を除くイギリス人社会は、アデラへの同情によって急に団結し、この機会に、混乱を呈するインド社会を自分達の論理でより強力に支配しようと目論み、アジズを犯人と決め付ける。インド人達はもちろんアジズの無罪を訴える。イギリス人とインド人の判断は、全く逆の立場からのものでありながら、それぞれの論理に基づいている。

そしてアデラの精神的混乱と比例するように、こだまが耳の中で暴れるのだが、実はアジズは自分の近くにはいなかったと確信し、彼は無罪だと思うと、その耳鳴りは弱くなる。他方、こだまを経験したムア夫人の直観は更に鋭くなり、次第に彼女は怒りっぽくなっていく。そして、自分の気持ちに極端なまでに忠実な（自己防御の）言動をするようになる。

イギリス人を襲う「音」の混沌については、「洞窟のこだま」より前に、作者は既に伏線として、ゴドボレ教授の歌を出している。それは、教育者フィールディングが、自宅に教授を招いた時、この高僧から聞かされる奇妙なインドの歌である。

His thin voice rose, and gave out one sound after

another. ... But the ear, baffled repeatedly, soon lost any clue, and wandered in maze of noises, none harsh or unpleasant, none intelligible. ... The sounds continued and ceased after a few moments as casually as they had begun—apparently halfway through a bar, and upon the subdominant. (pp. 71-2)

この歌を聞いた後、ムア夫人とアデラは無感動状態になり、「あたかも藪の中で暮らしている様な」日々を送り、そのまま呪術に掛かった心理状態でマラバー洞窟への日帰り旅行が行われ、事件が起きる。

さらに、裁判でアデラにアジズの無罪を宣言させる力となった、別のこだまがある。ムア夫人の名をヒンズー教の女神の名の様に变えて‘Esmis Esmoor’とインド人達が繰り返し詠唱し、それが裁判所の外の通りにいる人々にまで伝播したのだ。裁判所の内外で、イギリスともインドともつかぬ名前が連呼され、繰り返し流れる様は正に混沌であるのだが、それは法廷で真相を導き出すエネルギーとなった。アデラはこのこだまを聞いた後‘[a] new and unknown sensation’ (p. 216) に守られ、「何が起きたのか考えたり、普通のやり方で記憶をたどったり」することをやめて、直観で過去の世界に溶け込み、真実に迫ることになる。それは、裁判所の外からのこだまが、彼女の生来の誠実さと勇氣ある端正さに働きかけたのだとも言える。

VI. 東洋と西洋の融合—そのシンボル—

(1) 水

暑さのせいもあるのか、ムア夫人は船旅の途中で亡くなり、「もう一つのインドである」インド洋で水葬される。アラビア海で亡くなった彼女の幽霊は、紅海までは船について来たが、地中海に入ることができない。これはフォスターが意図した通り、西洋の世界に戻れなかったということである。

Somewhere about Suez there is always a social change: the arrangements of Asia weaken and those of Europe begin to be felt, and during the transition Mrs Moore was shaken off. (p. 244)

タートン氏 (Mr. Turton) が催したイギリス人とインド人の交流会—といっても、実際は交流する気は無く、ただ、インド人に「会いたい」と言うアデラの為に形だけ開かれたブリッジ（架け橋）パーティー—は予想通り失敗に終わったのだが、その‘bridge’の観念を遙かに超越し、何か異質のものを「結ぶ」というよりも、「間を総て満たすイメージ」の海の水にムア夫人を水葬したことで、彼女がインドとイギリスを真に結び付ける存在となったことが暗示される。ムア夫人の死は肉体の消滅であると同時に魂の復活であり、死であると同時に生でもある⁹⁾。こうして、彼女の名はヒンズーの神の名前の様に‘Esmis Esmoor’と裁判中にインド人達によって詠唱されることになり、彼達の守り神として偽の墓さえ作られ、人と神の間の境界が見えなくなってしまうのである。

水が、生命の象徴、或いは清めの儀式¹⁰⁾ であるだけでな

く、総てのものの隔たりや境界を無くすという意味も帯びている例は、ムア夫人の娘のステラ（Stella）と結婚したフィールディングが、彼女の弟（Ralph）と一緒に訪れたマウ（Mau）で出会ったヒンズー教の祭りの場面にもある。クリシュナ神の誕生を祝う祭りのクライマックスで、お盆に乘せられたゴークルの村の模型が池に落とされる儀式が行われた時、池から祭りを見物していたフィールディング・ステラ夫妻の乗った船と、マウに住むようになったアジズがラルフと一緒に乗っていた船が衝突して、4人と、この聖なるお盆と、アジズが密かにゲストハウスから持ち出したフィールディング宛の口ニーとアデラの手紙とが水面上に「入り乱れて」浮いた。そこに雨が降り注ぐ。この出来事の後、最終章でアジズとフィールディングは再び信頼を取り戻した。フィールディングとステラの心もそれまで以上に近付き、「ついに2人の間が輪で結ばれた」様に思われる。また、アジズがアデラの勇気を認め、彼女を許す契機となったのは、マウで一番大きな貯水池に落ちた時の啓示であり、ここでも「水」が象徴性を帯びている。

(2) 空

そもそもこの作品は、聖地が点在するガンジス川沿いのチャンドラポアの風景から始まる。川沿いの一番低い所から、無秩序に混在するインド人の町へ、そして更に視線が高く向けられ、やがて、高台にあるイギリス人住宅地へと移り、インド人とイギリス人の生活状況の相違を描写しながら、ついには、それら総て、彼等全体を覆い、包み込む大空を描く。空だけが両者の共通の環境である。

...it [the Civil Station] shares nothing with the city [where the Indians live] except the overarching sky. ... The sky settles everything—not only climates and seasons, but when the earth shall be beautiful. ... The sky can do this because it is so strong and so enormous. Strength comes from the sun, infused in it daily, size from the prostrate earth. (pp. 3-4)

支配者イギリス人と被支配者インド人の正反対の立場、それらを際立たせる洞窟での出来事も‘sky’という共通するもので覆われている。

ブリッジパーティーが催された時にも、距離を置いて固まっているインド人達と、もてなすという気持ちとは程遠いタートン夫妻を中心としたイギリス人達の間で‘impartial’ (p. 34) なのは、頭上で舞う何羽かの鷹であり、その上を飛ぶ一羽のハゲワシであり、そして何よりも、「公平に」広がる空であった。

空の描写は作中に何度も現れて、作品を展開させる主題となっている。最終章でアジズとフィールディングが最後に2人で過ごそうと馬の遠乗りをする場面にも‘There were round white clouds in the sky....’ (pp. 307-8) と空が描かれる。空は、人間世界を包み込む大いなる存在であり、地球と星を結んだ距離をはるかに越える広がりや背後に感じさせる。

空には、太陽と月が昇る。太陽は、総てを焼き尽くす破

壊的な脅威であり、イギリス人にとって避けなくてはならないものである。多くのイギリス人は暑い季節に避暑地に逃げて行く。太陽に関しては、‘...as if the heat of the sun had boiled and fried all the glories of the earth into a single mess’ (p. 220) や、‘as unpleasant as the sun’ (p. 248) といった表現が見られる。一方、月は、静寂や調和を思わせる。そして、‘moon’ と ‘Moore’ の頭韻からもわかるように、ムア夫人と深い関わりがある。最初にアジズがムア夫人と出会い好意を持ったのは、月光に照らされるモスクの中であったし、彼女がイギリス人のクラブに戻って見上げる月は夜空を桜草色に染め、イギリスで見る月よりも生気に溢れていた。そして月は他の天体総てと共に「夜のショール」に包み込まれ、‘A sudden sense of unity, of kinship with the heavenly bodies, passed into the old woman and out, like water through a tank, leaving a strange freshness behind.’ (p. 24) と、彼女に調和を肌で感じさせる。ムア夫人がチャンドラポアを去る時にもガンジス川に月が映っていた。

重要なのは、空がこのような正反対の要素である太陽と月を包容する存在でもあるということで、矛盾を包み込む神秘が表われており、異質な2つのものをも結びつけるものは、その間にかかる‘bridge’ではないのだということがここでも暗示される。

(3) 風

アデラがアジズを訴えた裁判には、反目し合うインド人とイギリス人が集まる訳だが、その双方に風を送る為に手動扇風機の紐を引いたり放したりする不思議な男の姿がアデラの目を引く。被告と原告の双方の真ん中に座り扇風機の風を送るのは、卑しい身分の、しかし大変見事な体格の男である。自分自身は風を受けることなく、自分がしている動作の意味も知らず、ひたすら紐と一体となって単調な動きを繰り返すその男をアデラは「人間の運命を超越した運命の男神」の様に思った。「インド人を見たい」と言っていた彼女は、ここに人種を超越し、更に人と神の境界も越えようとしている存在を見る。そして、裁判が終わり、ひっくり返った椅子が残された無人の法廷に風を送り続けている男の姿は、この訴訟など小さな小さな人間の営みに過ぎないという、インドの懐の深さをも感じさせる¹¹⁾。

イギリス人達のクラブで、演劇の上映を召使達に見られるのを恐れて窓を閉め切り、1台の扇風機は故障、別の1台は「傷ついた小鳥のように」回転している光景とは対照的である。また、‘everything in Chandrapore was used up, including air’ (p. 267) という場面では、停滞した空気が「神のメッセージを送る風」¹²⁾の存在を否定し、アジズの猜疑心を煽っていたことも思い出される。

VII. 終わりに

『インドへの道』を読み返す度に色々な感動を覚えるのは、優れた作品の持つテーマの重層性、良い意味での ambiguity に因るのだろう。素材レベルから見ると、インドの生態の‘muddle’を描き、思想のレベルでは、相対立する

東洋と西洋を包み込むヒンズー教の神秘主義が育まれたインドの姿（空、大地、自然現象）を表わし、形式のレベルにおいては、「インド人とイギリス人は友達になれるか」という課題について、弁証法による追究を行っている。作品は3部から成り、それぞれタイトルが‘Mosque’ ‘Caves’ ‘Temple’ であるが、別の視点から見ると‘emotion’ ‘reason’ ‘love’ とも言えるし、また、‘positive affirmation’ ‘negative retraction’ ‘muted reaffirmation’¹³⁾ とも分けられる。第1部でインドの支配者としてのイギリス人にとって、インドは混沌（muddle or chaos）状態と見える（定立：thesis）。森羅万象を論理的、合理的に把握し説明する彼等の目には、事象の区別、善悪の境界すら定まらず、総てが混在した状態と映る。それ故、イギリス人は、西洋的論理（logic or logos）によってその混沌に秩序を持たせ、西洋的効率を適用しようとする。（反定立：anti-thesis）。しかし、ここでインドの混沌とイギリス的論理がぶつかり合い、双方の弱点が浮き彫りになり、西洋的論理の適用には限界があることが認識される。洞窟でアデラを襲った犯人を探し当てようとするフィールディングに向かって、彼女が言った‘It will never be known. It’s as if I ran my finger along that polished wall in the dark and cannot get further. I am up against something....’（p. 251）という言葉がそれを表わしているだろう。そのことをMARTINは‘...whatever order man does manage to achieve can afford but a limited shelter in a disordered universe.’¹⁴⁾ と指摘している。これが第2部の内容である。

それぞれの土地には、長年にわたってその気候、風土に基づいた経験、習慣に育まれた叡智があり、そうした背景をそれぞれ持つ東洋と西洋の対立から一步進んで、インドで育まれた神秘主義（mysticism or mythos）、言語では表現できない論理を超えるものの実在に気付いて初めてイギリス人とインド人は結び付くという考えに、やがて作者フォースターは到達する（総合：synthesis）。言葉を換えると、インド的 irrationalism（定立）、イギリス的 rationalism（反定立）が衝突するが、そのまま対立し続けるのではなく、総てのものには irrational と rational の両方の側面があると認識して初めて、両者を包含する oneness（総合）が成就する。その経緯が、ヒンズー教の「総ては oneness によって統一される」‘each particular part is a member of all other parts, and...all is one in the Divine’¹⁵⁾ という教えを通して第3部で提示される。境界線で集団を区切ることをやめ、イギリス人、インド人、ヒンズー教徒、イスラム教徒、男、女などの区別・対立の意識を捨てた oneness の認識が見られる。

Infinite Love took upon itself the form of Shri Krishna, and saved the world. All sorrow was annihilated, not only for Indians, but foreigners, birds, caves, railways, and the stars; all became joy, all laughter; there had never been disease nor doubt, misunderstanding, cruelty, fear. (p. 278)

人間同士の結び付きこそ、mysticism or mythos の領域での oneness である。ヒンズー教のゴークル・アシュタミ

祭（Gokul Ashtami）での音楽がその象徴の一つで、狂喜とも言える明るさ（生命の喜び）に満ち溢れて、雨季の雷雨の中、合唱団が騒々しく歌い、それと競うかのように楽団が演奏する――

Music there was, but from so many sources that the sum total was untrammelled. The braying banging crooning melted into a single mass which trailed round the palace before joining the thunder (p. 275)

「神の誕生を祝う祭りでありながら、神は幾世紀も前に生まれているのであり、或いは生まれることができないのかも知れない」という定義は神秘的なヒンズー教の思想そのものを表わしている。祭りに集まったヒンズー教徒である村人達の顔は美しく輝き、美しさに輝いている間は個性が消え、皆似た顔になった。

そのヒンズー思想を体現するのがゴドボレ教授であり、それを生まれながらに備えているのがムア夫人である。2人は共に、インドとイギリスの境目を超越した「混沌」と「神秘」を兼ね備えた存在である。ムア夫人が途中で姿を消し、霊的存在になるのと対照的に、ゴドボレ教授はそれまでの言動の集大成とも言える位置を第3部で得る。ゴドボレ教授によると、善い行為も悪い行為も孤立したものではなく、人類全体、宇宙全体が関わっており、人智を超えて実存している。何が本当で、何が嘘か、何が善で、何が悪か、明確ではなく、西洋的論理を超越しているとしか説明のしようがない。

そして、善悪の問題は在不在の問題へと展開する。善悪は、神が持つ2つの面であり、神は善の中に存在（presence）し、悪の中には不在（absence）であるが、不在（absence）は非存在（non-existence）とは違う。従って、来てくれぬ神々に向かって「来たれ、来たれ」と呼ぶ意義があり、この「来たれ、来たれ」という呼びかけは、裁判における‘Esmiss Esmoor’に繋がっている。そのことを考えれば、ムア夫人は確かに法廷のインド人達にとって「不在」であっても、「非存在」ではなかったということが理解できる。実際に顕在しなくても、求めることに意味がある、とも言えよう。

ムア夫人はイギリス人でありながら、インドの心を持った女性である。このことは、彼女が東洋と西洋を結び付ける糸口となることを暗示している。まず、イスラム教のモスクに靴を脱いで入ったこともその表われであり、アジズとの会話の中の‘I don’t think I understand people very well. I only know whether I like or dislike them.’という言葉に感激した彼女が‘Then you are an Oriental.’（p. 17）と言ったことも、その証明である。その後、彼女はマラーバ洞窟でこだまに圧倒されてからますます感性が研ぎ澄まされ、キリスト教の神とも距離を置くようになる。アジズの事件についても、全く論理など関係なく、出し抜けに「もちろん彼（アジズ）は無実です。」と彼女は宣言し、ロニーを驚かせる。こだまの経験以降、自分の感情に正直に、周りの思惑など構わずに生きる。この、周囲の総てに関心を失う様子は、あたかも「臨終の先行体験」¹⁶⁾ である。アデ

ラの耳鳴りはいつまでも消えないだろう、とか、一度動き出した機械の歯車（洞窟での不可解な出来事に端を発し、アデラが引き起こした困難）は行き着く所まで行くだろう、と辛らつな言葉を浴びせ掛けるので、ロニーは裁判への悪影響を懸念して、裁判の前に母親をイギリス行きの船に乗せる。

そして、船上での彼女の死から2年が経ち、ムア夫人の血を引くステラとラルフがインドを訪れ、ヒンズー教に触れ、心揺さぶるものを感じる。フィールディングはアジズに、これまであまり分かり合えなかったステラとの距離がインドで近くなったと言うが、これも、人と人との境界をなくす‘oneness’の「神秘」のなせる業であろう。アジズがラルフに‘Then you are an Oriental.’ (p. 301) と言う時に、かつて同じ言葉を掛けたムア夫人のことが思い出されるのは、ゴドボレ教授が蜂とムア夫人の姿を突然心に浮かべる場面と同様、作品中に何度も響くムア夫人の‘echo’の一つである。

第3部でアジズは英国直轄地でのイギリス人との対立の日々から抜け出て、ヒンズー教徒の地であるマウで生活している。ヒンズー教徒を理解できないのは相変わらずであるが、その存在を認め共存している。一方、フィールディングは「ある程度『インドの圧制者』達と歩調を合わせることができそうだ」という気持ちになり、以前のように身軽に暮らす生活ではない。結婚し、収入を得て妻を養う為にも仕事として教育に関心を持ち、今では Anglo-Indian の一員となっている。フィールディングとの再会により、アジズは、それまでの思い違いが解決し、恨みも薄れ、敬愛するムア夫人の子供達、特にラルフと心を通わせる。

マウの密林の中へと馬で遠出をするアジズとフィールディングは、打ち解けて様々なことについて話し合う。かつて、アジズが大事な妻の写真をフィールディングに特別に見せたのと呼応するかの様に、今度はフィールディングが妻のことで悩みや喜びを明かす。確かに2人は「現実の泥からキラリと光る愛情、友情の宝石を結晶させることに成功」¹⁷⁾したのであるが、これからは社会的に出会う場がないであろうことも理解している。こうして時間を過ごす内に、「インド人とイギリス人は友達になれるか」という問題に立ち返る。

「なぜ今友達になれないのか。それはお互いが欲していることだろう」とフィールディングが言うと、アジズが「イギリス人を皆海に落としたら、その時友達になれる」と言う。ここでは「水」が浄化の手段として示されている。そして、2人の乗った馬が友情のもろさを露呈するかのようになり、土地が、神殿が、貯水池が、監獄が、宮殿が、鳥が、腐った肉が、ゲストハウスが、‘No, not yet.’ (まだ本当の友達になれない) と言う。また、第1章で、‘The sky settles everything—not only climates and seasons, but when the earth shall be beautiful.’ (p. 3) と言われていた空が、ここで意味深く ‘No, not there [on the earth].’ (そこ《地上》ではまだだめだ) と宣言する。

インドの oneness というヒンズーの思想へと観念的に到達したとは言え、作者フォースターがイギリス人（西洋

人）として、ヒンズー教の教えが理解の範疇を遙かに越えると感じ、自らの限界を認識した（或いは、文明の衝突や対立、それらの融合という人類の困難な課題に、今から100年近く前の20世紀初頭に真っ向から取り組んだ）ことがその理由であろう、彼は深い虚無感（思想）に陥ってしまう。その為に、彼はこれ以後小説が書けなくなる。この作品も、最後のところで plot の乱れが見られ、作者フォースター、言い換えれば、彼の姿を投影したフィールディングの真実追求で終わり、具体的な人間関係の打開、或いは、明るい展望が示されていない。その為に、この作品に‘pessimistic’ とも ‘optimistic’ ともレッテルを貼るべきではないという批評¹⁸⁾がある。そして、イギリス人と友達になり彼等を受け入れることを「まだだめだ」「そこではだめだ」と言う限定（条件）付きの否定の表現は、「とても難しい課題ではあるが、全く不可能という訳ではない」という解釈が可能であることを考慮すると、究極的には虚無感（思想）をはらんではいないが、それにも関わらず、実際のところ、それが為に、「人類（人間）は互いに理解し合う心を持ち合わせなければいけない」とするフォースターのヒューマニズムが姿を見せて作品が終わっていると言える。

テキスト

A Passage to India. Vol. 6 of The Abinger Edition of E.M. Forster.
Ed. Oliver STALLYBRASS. (London : Edward Arnold Publishers Ltd, 1978).

ページ数のみ記されている引用はここからのものである。

注

- 1) E.M. FORSTER, *A Passage to India*, ed. Oliver STALLYBRASS (1979 ; rpt. Middlesex : Penguin Books Ltd, 1980), p. 317.
- 2) John COLMER, *E.M. Forster : The Personal Voice* (London : Routledge & K. Paul, 1975), p. 169.
- 3) FORSTER, *op. cit.*, pp. 327-8.
- 4) Robert LANGBAUM, *The Modern Spirit* (New York : Oxford University Press, 1970), p. 141.
- 5) 田中雅子, 「A Passage to India におけるマラバー洞窟事件についての一考察」—『九大英文学』40号（九州大学大学院英語学・英文学研究会, 1997年12月）, p. 105.
- 6) 石和田昌利, 「E.M. フォースターの『インドへの道』の一考察」—『白山英米文学』29号（東洋大学文学部英米文学科, 2004年2月）, p. 13.
- 7) John Sayre MARTIN, *E.M. Forster : The Endless Journey* (Cambridge : Cambridge University Press, 1976), p. 150.
- 8) David MEDALIE, *E.M. Forster's Modernism* (Basingstoke : Palgrave, 2002), p. 169.
- 9) 岡本浩子, 「A Passage to India における Mrs. Moore の心的変遷及びその死についての考察」—『英語英米文学研究』30号（龍谷大学大学院英文学研究室, 2002年3月）, p. 9.
- 10) Norman PAGE, *E.M. Forster* (Houndmills : Macmillan Education, 1987), p. 116.
- 11) PAGE, *op. cit.*, p. 112.
- 12) 山本由布子, 「E.M. FORSTER 作 A Passage to India—風と神のメッセージ—」—Immaculata 3号（ノートルダム清心女子大学英語英米文学研究会, 1999年2月）, p. 80.
- 13) COLMER, *op. cit.*, pp. 158, 169.
- 14) MARTIN, *op. cit.*, p. 159.
- 15) Gertrude M. WHITE, “A Passage to India : Analysis and

-
- Revaluation (1953),” in *A Passage to India—A Casebook*,
ed. Malcolm BRADBURY (London : Macmillan, 1970), p. 144.
- 16) 林 節雄, 『20 世紀西洋人のモラル—『インドへの道』注釈』
(東京 : 北星堂書店, 2006), p. 223.
- 17) 林, 同書, p. 474.
- 18) COLMER, *op. cit.*, p. 157. PAGE, *op. cit.*, p. 116.

E.M. Forster : *A Passage to India*

—A Search for Reconciliation—

By

Akiko TERAMOTO*

(Received February 28, 2008/Accepted April 25, 2008)

Summary : *A Passage to India*, one of E.M. FORSTER's masterpieces, reflects what he experienced in India when he was young. Not merely the natural environments in India and the Anglo-Indians' daily lives in the early 20th century but also the inscrutable Hindu Teachings which fascinated FORSTER deeply are woven into the work. The mutual association between Aziz, a Moslem doctor, and Fielding, an English Principal of Government College, is foregrounded, while the problem, 'Is it impossible for the Indians to make friends with the English?', underlies the story.

The novel consists of three parts : 'Mosque,' 'Caves' and 'Temple.' Firstly, the Asian Hotchpotch (irrationalism) in India is shown before the Anglo-Indians. The latter work to introduce the Western way of thinking (rationalism) under the British rule. It is natural for such a structure to cause friction between the Oriental way of thinking (thesis) and the Western way of thinking (antithesis). These conflicting forces are integrated by use of Hindu mysticism : oneness (synthesis). In other words, it may well be said that both the Oriental and the Occidental elements are embraced by Hindu Teachings. FORSTER concludes that human understanding can be reached by some human wisdom based upon natural environments.

Though he achieves a theoretical synthesis, he does not end the novel with an optimistic conclusion : the friendship between Aziz and Fielding. FORSTER as an Englishman cannot help feeling that Hinduism is beyond his comprehension. And then he confronts a kind of nihilism, or a skeptical view of the world, which leads him to stop writing any novels ever afterwards. But in spite of all this, indeed, because of it all, he thinks that it is necessary for us human beings to seek for further mutual understanding between ourselves. What attracts FORSTER most is a universal issue of mutual understanding, developing from the reconciliation between East and West.

In this paper, I begin with analyzing the Indian hotchpotch (muddle) in such elements as 'time,' 'space,' and 'sound.' Then the inevitable confrontation between East and West will be discussed. Lastly the reconciliation between the two forces (cultures) will be scrutinized, referring to such symbols as 'water,' 'sky' and 'air.'

Key words : Indian irrationalism (chaos : muddle), English rationalism (logos : logic), Hindu Teachings (mythos : oneness), the dialectic integration of thinking, a sense of nihilism

* Foreign language studies (English), Faculty of Applied Bio-Science, Tokyo University of Agriculture